

教養学科、国際化を学んだ頃

第2期（1954年卒業）今井 正明

私が教養学科への進学を志したのは、教養学科の説明会で矢内原忠雄教養学部長が“これからの日本で必要とされるのは、長谷川如是閑のような、英語で言えば、バートランド・ラッセルのような国際的教養人を育てる事”と言われたことによる。リベラルアーツという言葉に初めて接したのも、その頃と思う。

以来六十余年を経て、未だに“国際的“教養人”から程遠い自分には恥じ入るばかりであるが、“国際的”に広く活躍して来られたのは、多くの先生や仲間達と青春時代を共有したお陰と、深く感謝している。

中でも中屋先生の伝統的な“しごき”を耐えながら原書を読み、ターム・ペーパーを書いた事は、後に英文著書を何冊か世に送り出した切っ掛けと成っている。

又、中屋先生の学術、言論界の幅広い知人、友人、高木八尺、松本重治氏等と直接、関接に接したことは、私の視野を広げる上で得がたい体験であった。

同期の仲間との思い出も多い。戸田寮に行ったこと、浜辺で知り合った女学生を寮に呼んで話し合ったこと、別れの舟から“バカヤロー”を連呼した事、松井ミサさんの音頭で“テネシーワルツ”を歌った事。そう言えば“バカヤロー”は中屋先生の口癖だった。

卒業後、私は日本生産性本部のワシントン駐在員として、五年間、日本からの訪米視察団の通訳を務め、広くアメリカの政府機関、企業、労働組合、農業団体等を訪問して、現地の実業に接したことは、言わば、アメリカ科課程の実業と言えるかも知れない。その間、数百名の日本に於ける各界の指導者と知り合えたのも貴重な体験であった。

帰国後は、国際ビジネス・コンサルティングを目的としたケンブリッジ・リサーチ研究所を設立した。アメリカではExecutive ResearchやEmployment Agencyの活動をみていたので、日本でも将来性があると期待していたが、職業安定法で禁止されていたので、当局に働きかけて、諸条件の緩和を得て、日本最初の人材紹介ビジネスを立ち上げた。また、当時はソニーのトランジスター・ラジオ

や電化製品の高品質、ホンダやトヨタの対米進出、等により日本的経営に対する関心が高まっている時期であった。そこで、私は五年間のアメリカの経験を逆手にとって、海外からの参加者を募って、日本の代表的企業を訪問する計画を立てた。

当時、ジャスト・イン・タイムで知られつつあったトヨタやデミング賞などの受賞会社を訪問すると、極めて協力的に受け入れてくれるばかりではなく、貴重な資料も惜しみなく提出して頂けた。

これ等のなまのデータは、私にとって、日本の実態を知る上で、大きな発見であり、驚きであった。これ等の経験にもとづいて、私は“改善（カイゼン）”が日本経営の要諦であることに気がつき、KAIZEN（1986年）、および GEMBA KAIZEN（1997年）を出版した。同時にカイゼン研究所を設け、世界各国に二十数ヶ所に事務所を置き、私は世界最小のグローバル・カンパニーのトップとして、年の半分を海外で過ごしている。今や日本は、世界第三位の工業国に落ち、厳しい状況に直面している。伊原総三郎君とは、会う毎に打開策を語り合っている。小松健男君とは、学生以来の“碁学”で競いあっている。明石康君は、相変わらず“国際的教養人”として現役で活躍しているのは、嬉しい限りである。私と言え、自分にとって大切なことは今までに何をしたかではなく、これから何が出来るかにあると思う。

アンドレ・ジイドの言葉を借りれば

“なしたる事の少なさに 耐えず
なすべき事の多さに 耐えず “

と言うのが、今の私の心境である。

以上